

今の仕事もそう長くは続かない、常に次の準備を整え、きたるべきビジネスチャンスに備えておく必要がある。アンテナを大きく広げ、情報収集に努める。実際、多角化部門へ移ってからずいぶん出張が増えた。このように“機をみるに敏”，でなければならないのだが、いつまでたってもシロウトという事態もおこる。

こんなことは常識なのだが、両方の部門を経験してはじめて実感として捉えることができる。その世界を外から眺める立場にならないと、中がよく見えない。その意味で、日本を離れたことが自分の会社、そして日本のことを知る上でとてもプラスになった。アメリカを知るために渡米したのではなく、会社と日本のこと、ひいては自分を知るために国外に出た、といえるかもしれない。

たとえば MIT にも大勢の日本人が派遣されている。職場を離れて国外にいるということと、自由なアメリカ生活のために、みな友好的、開放的で、国内ではできなかったような情報交換も可能になる。よくよく聞いてみれば、建前では横並びのはずの給与にたいへんな差があることがわかって腹を立てたり、会社とのトラブルの解決に同業他社の人から智恵を借りたり。このように会社間の垣根が低くなり、人的ネットワークができる。これは大きな財産だ。またそれらの交渉を通じて、会社間の意思決定プロセスの違いなどを垣間みることもでき、自分の会社がどういう特徴をもつかも分かるわけだ。

さて日米の研究体制についていえば、MIT でも個人プレーは少なく、横断的に研究が進められていることが意外であった。ただし、これは共同研究という意味合いではなく、自分が詳しくない部分に対しての補足や、論旨の弱い点、見解が分かれそうなところの指摘などを通じての相互啓発である。ただし、目指しているのは、MIT や会社など特定の集団に貢献することではもちろんなく、自分個人を世界にアピールすることなのだ。したがって勤務時間など関係ない。実際、私のホステスであったドレスセルハウス教授などは朝の 6 時から大学に来ており、休むのはクリスマスだけ。アメリカ物理学会会長を経験し、MIT 教授連の頂点に立つ 10 人足らずのインスティテュートプロフェッサーの地位を手に入れた彼女でさえこの働きぶりなのだ。働きバチを非難する声はここにはない。

学生たちもそれぞれ必死なのだが、間違っても彼らが日本の大学生より勉強好き、などと考えるはいけない。その原動力は「将来の地位と金」以外の何ものでもないのだから。頑張ればその見返りが保証される公平な社会、それがアメリカだ。どんな大学をどんな成績で出ようが初任給も地位も同じ、というシステムこそナンセンスかもしれない。

私の場合、外国にて転進の第一ステップを踏んだので辛いことも多かった。鉄鋼の上工程から MIT の固定物理の研究室へのジャンプで、これはどう考えても楽なはず

がない。しかしおかげで、未経験の分野へ飛び込む不安、恐怖心といったものが相当薄らいだ。いまでは、どんな分野でも 1 年あれば 1 人前の顔をし、2 年でプロになれるという妙な自信というか開き直りのようなものが身についた。ひと皮むけた気がする(単にあつかましくなっただけ?)。

転職は 30 才までといわれる。私の場合、転職ではないが 30 過ぎて転進した。「新しい世界へのチャレンジ」それを少しでも求める人には年齢など関係ない。人生は一度だけ。現状に納得できず、かといってそれから抜けだせないで何となくグズグズしている人……翔んでみませんか!

学生による材料フォーラム

浅井 滋生

名古屋大学工学部 工博

去る平成 3 年 11 月 7 日、日本鉄鋼協会東海支部・日本金属学会東海支部共催による「学生による材料フォーラム」が名古屋工業大学大学会館において開催された。世話人の一人として、本フォーラムの模様を報告する。前支部長宮田氏(前:新日鉄名古屋製鉄所副所長)が在任中、常に指向されていた、企業に働く人間と大学人との密な交流、を現支部長沖教授(名古屋大学)のもとで実現に漕ぎつけたもので、東海地域の企業の方々に教育現場を理解していただくことと、学生の勉学意欲の高揚を狙って開催された。東海地区にあって材料関連の研究に携わる一つの研究室から一題を原則として、大学院、学部の学生に研究発表をお願いしたところ、当初の予想



写真 1 材料フォーラム開会のテープカット
(左から沖教授、森田会長、宮崎教授)

を大きく上まわる 46 件の申し出があった。研究成果はすべてポスターセッションのかたちで発表された。

会はテープカットで始まり、世話人を代表して、宮崎教授（名古屋工業大学）が開会宣言を行い、支部長挨拶に引き続き、わざわざ本フォーラムのために遠路駆けつけて下さった日本鉄鋼協会会長森田教授（大阪大学）が協会本部の本フォーラムへ寄せる熱い期待を述べられた。学生 164 名、教官 55 名および企業側から 46 名の計 265 名が一堂に会する盛況であった。人いきれと熱気につつまれた雰囲気のもと活発な討論が 46 のポスターセッションの各テーブルに繰り広げられ、終わってみると 3 時間に及ぶ発表時間も不足ぎみに感じられるほどで、会の終了宣言後も会場のここかしこに討論の輪が残る有様であった。企画する世話人にとっても、発表する学生にとっても初体験であったため、当初かなりの混乱と戸惑いも予測されたのであるが、この初体験がかえって適度の緊張感を醸し出し、会を盛り上げる結果となった。

開会後まもなくしてはじまった激論の輪が、その数を増すにつれ、所定の目的は達成されたと安堵したしだいである。1 高専と 6 大学の 13 学科から寄せられた研究発表は材料の物性、加工、プロセスと多岐の内容にわたり、かつ、発表内容も学会等で十分発表できるものから未完成のものまで色とりどり見られた。また、発表者も学部生から大学院博士課程の院生と幅広く、研究内容の興味もさることながらその応答ぶりを楽しんでいる参加者も見受けられた。反省点・要望点としては、指導教官名を記載してほしい（発表は学生による材料フォーラムということで指導教官名は伏せられた。）、発表研究の分野の大きな流れとその中での位置づけを明確にすべき、等の声が企業側参加者から聞かれ、一方、発表に当たった学生からは、「この研究は何に使えるのか?」といった企業側からの近視眼的質問の数々に窮したとの声もあった。寄せられた声それぞれが現在の企業人、大学人の思考や関心の的を反映しており、企業と大学それぞれが社



写真 2 フォーラム会場風景

会で健全に機能している証拠と感じられた。

閉会后、ビール会社直営店の大宴会場にて発表者の表彰が行われた。予定を急遽変更して最後まで残られることとなった森田会長をしてその挨拶の中で、発表内容は本部の講演大会にも匹敵するものが数多く見られ、かつ本フォーラムは支部活動のあり方に大きなエポックをなした、と言わせしめ、そして今後、全国にこのような形式の会の普及が期待されるとの絶賛のお言葉をいただいた。乾杯を待ちかねたように、準備された料理は 10 分もたたないうちにその大半が学生の胃袋に納まり、追加に次ぐ追加も焼け石に水、飲み放題のビールのみがかろうじてテーブルに残る有様であった。そのため有料で参加していただいた企業の方々には空腹とも相まって学生のヤングパワーを強烈に印象づける場となった。

本フォーラムは産業界と大学との情報交流の場として支部活動の活性化につながり、学生の研究意欲の高揚に資するところが大きいと実感しており、東海支部では本企画の継続を計る予定である。日本鉄鋼協会からは会長じきじきのご参加、日本金属学会からは表彰品の寄贈という望外の支援をいただきました。ここに両会本部の御好意に対し厚くお礼申し上げます。なお、本フォーラムが成功裡に終えることができた裏には名古屋工業大学材料系教室の学生諸君の絶大な手助けがあったことを付記し、謝意を表します。

北京のホテルでの朝食

大谷 正 康

(株)神戸製鋼所常任顧問 工博

神戸製鋼所スラグ建材部 田部部長、鉄鋼技術研究所稲葉製銑室長とともに 6 月 24 日午前北京へ出発、約 4 時間のち北京首都空港に到着した。時差は 1 時間遅れであるが、夏時間採用のため実質時差はない。

入国、税関検査も問題なく北京事務所の清水所長、森本主任部員および張高級エンジニアらの出迎えを受け、張さんとは 1 年振りの再会を喜び合った。

並木の美しい道を通って Shangrila Hotel (北京香格里拉飯店) へ。

翌朝 7:15、ロビーで落ち合い朝食のため 1 階のレストランへ。入口でウェイトレスから「あなたがたはこれくらいの小片を持っているか」と手で示された。「持っていない」と答えると、「ここでは食事できない」との返事。そこで黄門様の印籠よろしく「これではどうか、確かに宿泊者だ」とキーについたルームナンバープレートを示したにもかかわらず、「だめだめ、あなた方は 2 階のレストランに行きなさい」といわれて大の男 3 人 (1